

もう一つの顔は 「ハリキリ戦隊ソーサマン」誕生☆

「ハリキリ戦隊ソーサマン」誕生☆

毎年10月に行われる、千葉県匝瑳市そうさの市民まつり「よかつぺ祭り」。2007年には、経費削減から、子どもたちが楽しみにしている着ぐるみショーが呼べなくなりました…。ならば自分たちの力でヒーローショーをやってみては！…の発想のもと調べてみると、各地にいったばいいたローカルヒーローたち。「よそにいないならば匝瑳市にできないはずねえべ」といったわけで市職員ボランティアにより「ハリキリ戦隊ソーサマン」は創造された。ハリキリ戦隊ソーサマンは、赤・青・黄色の3人のヒーロー。ソーサレッドは匝瑳市の平和を、ソーサブルーは環境を、ソーサイエローは健康を守っている。

匝瑳市を暗い暗黒都市に陥れようとする闇の秘密結社「ブラックドブラック団」の原黒々博士はらくろくろくが繰り出す怪人の能力に負けそ

うになつたり、容姿にビビつたりと毎回ピンチに陥る。だが、子どもたちの声援とギリギリのところまで繰り出される「知恵」で、敵を倒し匝瑳市を守っている。

そんな、ハリキリ戦隊ソーサマン…。匝瑳市役所に勤務する私のプライベートに、こんなに入り込んでしまうとは…。

入隊の動機・きっかけ

「よつ、菱木君」

その声をかけられたのは、前日の帰り道、雨に打たれながら段ボールの中で震える子犬を助けてあげられず、朝から陰惨たる気持ちで仕事に臨んでいたときだった。

声が出たほうを振り返ると、商工担当のK先輩がにこやかに立っていた。

K先輩には、数年前に同じ課に所属していた時分、大変お世話になった。

K先輩は非常に頭の回転が速く、仕事も



菱木 照仁
匝瑳市福祉課

できる上に気さくな性格で「この人みたいになりたいなあ」と思わせる、自分が最も憧れる人物30人のうちの一人である。

「今度の1173（イイナミ）デーのイベントにさ、ソーサマンで出てみない？」

海岸線のある本市ではサーフィンが楽しめるため、1173（いい波）デーをもうけ、サーファーが海岸線をきれいにするというイベントを開催している。

K先輩が職員のボランティアによるソーサマンとやらを立ち上げ、市内の催し物はあるか、市外や県外まで遠征しているという噂は聞いていたが、実際ソーサマンのK劇団(?)に誘われたのは初めてだった。

（うーん、どうしよう…）

一瞬戸惑い、「正直めんどくさい」と思ったのも束の間、K先輩は「かぶりものはないで、そのままでもいいからさ」と私に伝えてきた。

（えー、素面のほうが恥ずかしいじゃん!）



ダンスブームのって怪人との無理あるダンス



匠瑛市の平和を守るソーサレッド、環境を守るソーサブルー、健康を守るソーサイエローの3人そろって(一人前の)ソーサマン☆



わなにかかって大ピンチ!!

をする者もすべて職員で、仕事やプライベートの都合もあるため、特定の役柄というものがな

「とりあえず、サーファアの真似してくれればいいから」と言うK先輩の笑顔の中に、かつて父が町内会の催しに着ぐるみを着て子どもたちに囲まれていた光景を思い出して、「自分も子どもたちの人気者になれるかな」なんてよこしまな考えを浮かべながら、つい、「わかりました」と返事してしまった。

ソーサマンの具体的な活動・頻度

出だしは不純な動機で参加しながらも、月に1〜2回のイベント出演に毎回参加するにつれ、ソーサマンは子どもたちにも人気があるのかと実感させられた。悪役が出てくると本気で怖がってくれ、ソーサマンがやられそうになると、自然発生的に子どもたちは必死になって「がんばれー!!」と応援してくれる。

ソーサマンの格好をする者も悪役の格好

い。私はほぼ毎回参加するようになり、あるときはソーサマン、またあるときは怪人と両方をこなすようになったが、やはりソーサマンのときのほうが気持ちよい。自分が子どものときに見た父も、同じような気持ちだったのかと考えるから。毎回参加していると不思議なもので、「やらされている」感から「自分だったらこうしたい」といった、欲のようなものが芽生えてきた。そこで勇気を出してK先輩に「ソーサマンショーの台本を書かせてくれないか」と申し出てみた。K先輩から快諾を得て書いてみたものの、なかなか難しいと気付いた。実際、私が書いた台本に基づいてリハーサルをやってみると、頭の中で描いていたものよりもずっと言葉が足りなかったり、思ったとおりの筋書きにならなかったりと、描写を文字に起こすのには大変苦労した。苦労したと言えば、台本に加え手伝うようになった小道具作りもそうだった。ソーサマンショーでは毎回異なる敵を用意するため、怪人の着ぐるみに入る敵役の人の視界が確保できるよう、その人の目の位置に合わせてマスクに穴をあけなければならぬ。また、マスクの襟元が敵役の人の体格に合うよう、その人に実際にかぶってもらいながらマスクを切つて調整するのだが、いつも「Yシャツの襟くらいならまだしも、手元が狂って首とか耳たぶを切ってしまったらどうしよう」と少々おびえながらの作業に、

苦労させられている。

また、ソーサマンはあくまでもボランティアであるため、通常業務の時間中はそういった作業には当たれない。そのため、ほぼ毎週水曜日の勤務終了後は「ソーサマンの日」となっており、少しでも人手を増やそうと、決まって周りの人たちに「ソーサマンやらない？」と声をかけている。

ここまで来るとまるでソーサマンの布教活動のようだ(笑)。

苦労と言えば、イベントが近くなるとソーサマンの企画会議(と称した飲み会)を行うため、小遣い制の私には苦しいときも…。

自身の中での変化

ここまで入り込んでしまうと、自分の中でも変化が生まれてきたのが感じられた。

初めは演じていても恥ずかしかった声優役やソーサマン、敵役であっても、モジモジしているとその感情が見ている子どもたちにも伝わってしまう。だから、こういうものは開き直ってしまったほうがいいのだ、と知った。それからはもうハジケてしまって、演じるのが楽しくて仕方ない。まるで自分が俳優にでもなったかのようなつもりである。

もちろん、演じるに当たって、プロのスタッフアクターの人たちはどのように演じているのか、研究もしなければならぬ。

自分の子どもと一緒にになって、特撮ヒーローもののテレビ番組を見てみたのだ(今で



子どもといっしょに必殺技
「バケツの水 アタック!!」



なぜか匝瑳市のゆるキャラと戦うことも…



難読市名で交流のある兵庫県宍粟市(しろうし)の「しーたん」と

は子どももヒーローものから卒業しつつあり、自分だけが夢中になって見ていることもあるのだが…。

そこで気付いたのが、プロのスーツアクターたちは、オーバーアクションではないのだ。どういふことかと言うと、素人はセリフに合わせて動こうとすると、とかくオーバーアクションというよりはボディランゲージになってしまふ。しかし、オーバーアクションはボディランゲージやジェスチャーではなく、あくまでセリフに合わせて感情を体で表現しているのだ。まさに私もそうであつたため、目からウロコが落ちたようであつた。

シナリオについても同様に、話の流れの持つていき方などかなり参考にさせてもらった。必ずヒーローが勝つという「水戸黄門」的な話なのであるが、その1話1話の中に、登場人物が成長していく過程や、人と人との和を紡いでいくストーリーを織り交せてあ

つたのである。

私が生きている頃は、もちろんそんなふうには見てはいなかったのだが、大人になってから見てみると、物語として実によくできていて感心してしまった(制作者はみんなプロなのだから当然ではあるが…)。

それ以外にも、自分に任せてもらった台本書きや小道具作りに対し、仕事とはまた違う「責任感」が生まれた。

イベントが近づくにつれ、ソーサマンを演じる職員たちがシナリオを待っているのはもちろん、「子どもたちがソーサマンを楽しみにしているんだ」という、モノづくりの向こう側に見える風景を思い浮かべると、そこには「責任感」と自分が果たせる「役割」が感じられるようになった。

その変化に家族も気付いたようで、ソーサマンに参加したの頃はまだ幼くて赤ちゃん言葉であつた私の子どもも、最近では「お父さん、がんばってるね」などと少々生意気なことを言うようになってきた。ただ、その一言は親としても一職員としてもうれしい限りである。

プライベートでも変化があつた。

これまで自分は内向的な性格の持ち主で、趣味もどちらかと言うとアウトドアよりもインドアのものを選ぶことが多かった。事実、独身時代はテレビゲームが好きで、休日も家の中で一人、こつこつとロールプレイングゲームを進めていた。

ところが、ソーサマンに参加して外出が増

えるうちに、外で活動するものに興味が湧くようになった。そこで始めたのがロードバイクを使った「サイクリング」である。ソーサマンで子どもたちに囲まれる気持ちよさはまた違った、体を動かし、風を切って走る気持ちよさにすっかり魅了されてしまった。今、いつか実現させてみたいと思案しているのが、ハワイでのサイクリングである。ただし、極度の高所恐怖症と飛行機恐怖症を克服できれば、といった条件付きではあるけれども…。

気をつけていること

ソーサマンを始めると、子ども向けのショーをやるに当たって、気をつけなければならぬことがあることに気付いた。

まず、単純なことのように気付かないのが、ソーサマンや敵役の怪人になったときには「ステージから落ちないこと」である。

あのマスクをかぶつたことがある人ならばわかる(そんな機会がある人は滅多にいないと思う)が、視界はほぼ真正面だけで、自分の足元さえ見えない。子どもから握手を求められても、特に小さい子どもなんかは姿が見えずに、ぶつかってしまったりすること…。灯台もと暗しどころではないので、もしマスクをかぶれる機会があれば、体験されることをぜひおススメしたい。

シナリオを書くに当たっては、「バカ」や「死ね」を絶対にセリフに入れないようにしてい

A

「ハリキリ戦隊 ソーサマン」
 作詞 ソーサマン 作曲 BOBO
 歌 モノマネソーサイエロー

ソーサソーサ ハリキリ戦隊ソーサマン

赤いバクション 平和の証し
 笑顔の故郷Let's! SO-ZOU
 戦争 一層 暴力追放
 黒い影は SO LONG!
 ひとり ひとりじや
 折れるけど 束ねれば強い
 君が生まれた そのわけは
 必ず! 意味がある
 中央農業須賀匠 瑤やかに匹を
 そつさ 俺たち
 ハリキリ戦隊 ソーサマン ※繰り返し

青いバクション 自然を仰ぐ
 きれいな環境 Get! SO-KAN
 清掃 早々 効力上昇
 黒い闇よ SO WHAT?
 ひとり ひとりじや
 騒動だけど 文殊の知恵で
 人に言えない よーな出来事
 必ず! 悪いこと
 豊和吉田版高共興 瑤やかに匹を ※

黄色いアクション 心よ癒える
 健康たもてば Yes! SO-KAI
 体操 快走 筋力増強
 黒い敵に SO THERE!
 ひとり ひとりじや
 もめりけど 一両指で
 自分自身で できること
 必ず! やりとげる
 平和梅海野田栄 瑤やかに匹を ※

三人そろって負けそうなとき
 みんなのパワーで
 ピンチをチャンスに!!
 君のガンバレ ハートに受けて
 必ず! 立ち上がる
 八日市場と野栄で匹を
 瑤やかに匹を ※



ソーサパンチ!! 怪人は九官鳥男。
 この怪人が作曲した曲にソーサマン
 が自分で詩をつけてテーマ曲とした

る。ソーサマンショーでこの「バカ」や「死ね」を使うことで、ショーを見た子どもたちが言葉を真似するようになってはいけなからだ。

生まれたときからすでにテレビやインターネットがある今の子どもたちにとって、さまざまな影響を与える情報があふれている。テレビやインターネットを始めとした情報源は、ややもすれば情報をただ垂れ流しているとも言えなくもない。そういった環境は、まだ自己の確立されていない幼児にとっては、やはり大人が取捨選択してやらなければならぬ。そのため、ソーサマンショーでは、「バカ」と「死ね」だけは使わないようにしている。ただ、これが結構難しい。

また、継続的に子どもに見てもらうため、大人が見ても面白いと思えるもののできるよう心掛けていく。そのため同じ内容のショー

はやらない。同じ内容のショーを続けらればマンネリ化してしまい、子どもが見たがって、子どもが見たがって、も、連れて行ってくれる肝心の親が飽きてしまう。「将を射んと欲すればまず馬を射よ」といったところか…。

ただ、敵の怪人だけでもすでに50体以上は作成されているので、特撮ヒーローものならば、1年4クールを終

えているところである。

続けるためのポイント

私がここまで続けられているのも、ひとえにK先輩のおかげであると思う。川島先輩はとにかく頭の回転が速く、自分が気付かなかった物の見方というものを示してくれるのだ。やはり物事を多面的に見られる人とのモノづくりは非常に楽しく、自分とは違った角度からの物の見方は勉強になる。

自分の中では、ヒーローは負けてはいけない存在だと思っていたし、必ず敵に勝つものと信じていた。これは子どもの頃から見ていた特撮ヒーローに慣らされてしまった固定概念であり、それをいい意味で打ち砕いてくれたのがK先輩である。

K先輩はなんと、「ソーサマンが敵に負ける」という、当時の私には衝撃的なシナリオを書いたのだ。

市内のイベントでは大勢の子どもたちに囲まれるソーサマンも、ひとたび市外のイベントに行けば、子どもがいるとは限らず、ショーで自然発生する声援も起きないこともままある。

そこで、ソーサマンは子どもたちの声援がなければ負けてしまう、といった「あつてはならない」ことをK先輩が考えたことに、度肝を抜かれてしまった。しかも、負けた後に「はいっ、今日は負けちゃいましたねー」ときわめて軽い一言で負けた事実を片

付けてしまう荒技を生み出したのだ。実際にソーサマンは市外でのショーでたびたび負けている(笑)。

どのようなことを感じているか

そんなソーサマンであるから、子どもたちが楽しそうにしているのを見ると、自分も楽しい。ソーサマン役ときは声援をもらおうと「やったな」と感じる。

はたまた敵役のときは、子どもたちが泣いたり、睨んだり、中には手に持っているポテトを投げつけてきた子どももいた。そんなときもやっぱり「やったな」と感じる。すごく「得」をした気分になるし、人間的にも「徳」を積めたような気分にもなる。

そして、純粋な反応をする子どもたちを見てみると、人口が減ってきてはいるが、一人ひとりの人やコミュニティ、また匠瑤市の潜在能力はまだまだ眠っているような気がしてならない。

ソーサマンの主題歌(これも職員たちで作詞・作曲したもの)の中に、「君が生まれたそのわけは 必ず意味がある」といったフレーズがある。子どもたちには、ソーサマンショーを見て何かしらを感じ取ってくれたらいいと思う。

子どもだけでなく、すべての生あるものには意味があるのだ。

あの日、雨の中で震える子犬が今、元気で暮らしていてくれるのを願って。